

全員入院がかなわぬ現実と向き合う

コロナ患者を見て回る訪問看護師の訴え

在宅酸素、ステロイド、抗菌薬、解熱薬、点滴のコンフォートセットを

2021/04/30 [三和 護](#)＝編集委員

神戸市で訪問看護師として活動している藤田愛さんが、コロナ患者の危機的な現状を SNS で発信しています。以下にその文章を紹介します。「コロナ患者の訪問は(のべ)100 件を超えただろうか」と振り返る藤田さんは、全員入院がかなわぬ中での訪問看護の現実を知ってほしいと訴えています。

* * * * *

千分の一のコロナの訪問看護



敗戦中の従軍看護師はこんな気持ちだったのだろうかとか、

毎日ぽきぽき心が折れてゆく。一日回れても8人、重症者が増えてきたので一件ずつの訪問時間が長くなる。

せめて入院までの間、訪問してくれる訪問看護ステーションをご存じないですか？ もうその保健師さんの声が悲鳴である。ないとは言えなかった。行きますよと返事してしまうのが、自分の弱さだと分かっている。

有料道路を乗り継いでいく初めての土地。真っ暗だから、ここは県外か？ どこに向かうのかとか、訪問先のことなのか自分のことなのか分からない問いがわいてくる。

到着が21:00になった。家のドアを開ける時に心が定まる。できることをする。

待たせてごめんね。病院の廊下でもいいですから、入院させてほしいとお母さんに手を合わされても、私にはどうすることもできない。咳き込んでいるので、窓全開でも気が散りそうになる。集中して血管を探す、よし入った。ステロイド入りの点滴、焼け石に水でもないよりまし。来てくれただけでも命が見捨てられてないと感じて希望が持てます、と言われる。

こんなこと、だれが知っているのか、どう発信すればいいのか。

今ここに居合わせている私でさえ、信じたくない気持ちが反発しているくらいなのに。

呼吸数 54 回、酸素吸入 7L、39°C 台の発熱が続く。

大病院で検査して陽性となり帰宅後、一週間。おいおい、このままじゃ今夜死ぬかも。持病の薬が床に散乱している。飲めないよね、呼吸数 54 回じゃ。まだ 30 歳代。

できることは正しく、危機感が伝わる報告をすること。

保健センターに、数値と判断を伝える。

「早急な入院治療が必要です、そうでなければ感染症か呼吸不全か心不全かで急死の可能性ががあります」

どれだけ同じような報告を保健師は聞いているだろう、悲鳴の向こうにまた悲鳴がある。

訪問を終えての帰路、保健センターから電話が入った。

10 分後に救急搬送できることになりました。

もしよろしければ搬送先を教えてください。

〇〇病院です。

お一、重度者治療の病院である。救えるかも。

ああ、よかった、ありがとうございます。保健師とほんの数分言葉を交わし、一緒に悲しんだり喜んだりできるのが支えとなる。

コロナ患者の訪問は(10 人にのべ)100 件を超えただろうか。(神戸市のコロナ患者は累計で 1 万人を超えたので)1000 分の 1 と思う。訪問して急変を見つけても、頼れるかかりつけ医も病院もないなら、私のやっていることに意味があるのか。いやあるからやっているのだ。

信じたくなくても、一丸となって本気の緊急事態宣言を皆でがんばるしかない。飲食や観光、私の人生の一部だ、絶対に守りたいと思う。だけど今の命なくして、未来はない。

全例入院治療がいいに決まっている。でもかなわないなら、医師にコロナ特例での免責を行い、対面なしで在宅酸素、ステロイド、抗菌薬、解熱薬、点滴をコンフォートセットにして処方できるようにしてほしい。まだ、私自身は実施例が少ないが、これ(コンフォートセット)で救える命もかなりある。滞在時間も 30 分以内にとどめられる。

でも回復を約束できるわけじゃない。それでも何もせずにいつとも分からぬ入院を待つよりいい。このことを離れた家族は知っておいてほしい。それでも、(訪問看護師らが)引き受け手がいない中で全力を尽くしていることを理解してほしい。

この事態について全国民の理解が必要である。県外に住む家族に「おいこらオマエ、治療せんか、入院させろ」とすごまれたってできんものはできん。

ご心配でしょう、そうですね。私たちが生まれて、急病なら医師の診察、救急車があたりまえでしたね。残念ながら今の神戸はその状況にありません……。静かに強く現実を伝えてゆく。もう何回目か覚えていない。30分から1時間はかかる。10人しか担当していない私でさえそれだから、保健所が受ける電話がそんな電話で埋まる。保健師が次々倒れて、より人が減るのもあたりまえだ。倒れなければ休めない。

1000分の1のコロナの訪問看護を綴ってゆきます。

今、酸素飽和度85%だった方。あかんかと思ってたら、酸素、ステロイド、抗菌薬の3日目、94%にあがったと電話が。そんな会話できる人だったことを、今初めて知ったわ。私、こう見えて商売人やもの。話得意やねんで。うれし泣きで始まる今日の朝。

救える命を増やすためにコンフォートセットを

藤田さんの発信からは、神戸市のコロナ自宅待機者が置かれている厳しい状況が伝わってきます。夜の9時。訪問したのは30歳代の患者です。「呼吸数54回、酸素吸入7L、39°C台の発熱が続く。大病院で検査して陽性となり帰宅後、一週間。このままじゃ今夜死ぬかも」という切迫した事態に陥っています。藤田さんからの「早急な入院治療が必要。そうでなければ急死の可能性があるので」との報告に保健センターが動き、10分後に救急搬送できることとなったのです。

こうした状況に対して「全国民の理解が必要である」と藤田さんは訴えます。コロナ禍で医療がひっ迫し、入院調整中の自宅待機者が増えてしまうことで起こる命の危機。30歳代の患者は救急搬送となりましたが、もしも救急搬送先がなかったら、どうしたら救えるのか——。最悪の事態への備えを急がなければなりません。

対策の1つとして、救える命を増やすために「対面なしで在宅酸素、ステロイド、抗菌薬、解熱薬、点滴をコンフォートセットにして処方できるようにしてほしい」と訴えています。喫緊の検討課題なのだと思います。